

# 長州ファイブ

2007(平成19)年1月10日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本=五十嵐匠/出演=松田龍平/山下徹大/北村有起哉/三浦アキフミ/前田倫良  
/原田大二郎/榎木孝明/寺島進/泉谷しげる (リベロ配給/2006年日本映画/119分)

……幕末モノ・明治維新モノ映画は数多いが、イギリスへ密航した「長州ファイブ」の若き日の姿を描こうとした視点は出色！ただ、躍動感に溢れ、歴史の勉強にもなる前半に比べ、後半は多少看板に偽りあり……？ 1863年の密航から約140年後の今、「命をかける」「ワシらが日本を変える」、そんな気概を持った若者は一体どこに……？

## 長州ファイブとは……？

歴史大好き人間の私でも、『長州ファイブ』というタイトルを聞いて、「そりゃ一体ナニ……？」と思ったくらいだから、今ドキの若者は5人の主人公の名前を聞いてもほとんど知らないのでは……？ もっとも、団塊世代の私たちは、5人の中の2人はよく知っているはず……。また、坂本龍馬が写っている写真は誰でもよく知っているが、若き長州ファイブがポーズをとって写っているロンドンでの記念写真も、多くの人はこの映画を観るまで知らなかったのでは……？

詳しくは各自勉強してもらいたいが、①密航当時27歳の志道聞多（北村有起哉）は、後に井上馨として明治政府で初代外務大臣となり、②密航当時21歳の伊藤俊輔（三浦アキフミ）は、後に伊藤博文として初代内閣総理大臣となった人物。そして、③鉄道に興味を持った密航当時20歳の井上勝（山下徹大）は、帰国後鉄道局長官などを歴任し、④造幣技術に興味を持った密航当時27歳の遠藤謹助（前田倫良）は、大阪造幣局長をつとめ、⑤密航当時26歳の山尾庸三（松田龍平）は近代化を進める人材育成に目を向け、工部大学校（現在の東京大学工学部）の設立に尽力した人物。この5人組のイギリスへの密航は1863年5月、すなわち1853

年7月8日のペリー率いる黒船の浦賀来航からちょうど10年後のことだ。

## 🎬 キーワードは夢、決意、国家……

戦後61年余り、平和の下で経済繁栄を享受してきた現在の日本は、実に「ヘンな国」＝「国家の品格」を失った国になっている。その最大の問題点は、私の診断では、若者が夢を失い、命がけで決意することができず、国家を語るができなくなったこと。そんな憂うべき現在のニッポン国に実にタイムリーに登場した、この映画のキーワードは夢、決意、国家。わずか4隻の黒船によって徳川300年の太平の世が破られ、開国だ、攘夷だと国をあげて大騒動となっている中、長州藩主、毛利敬親（榎木孝明）の承認はあるものの、幕府にバレたら死罪ということを承知で、イギリスへの密航を決行した「長州ファイブ」の動機は、『『生きたる機械』となって長州へ戻るんじゃ！』ということ。日本を変えるため、命をかけて海を渡った彼ら「長州ファイブ」には、現在のニッポンの若者が失ってしまった、こんな国家に対する夢と決意がいっぱい……。

## 🎬 現総理大臣のルーツの旅としてもタイムリー

5年半にわたった小泉純一郎総理の跡を継いで総理大臣となった安倍晋三氏は、お正月に2夜にわたって放映されたテレビドラマ『白虎隊』で有名な会津藩のあった福島県の県民からは今なお敵だと目されている（？）長州藩の領地であった

山口県の出身。幕末から明治維新へ推し進める原動力になったのは、土佐の坂本龍馬の尽力によって成った薩長同盟。したがって、その初期の時代に活躍した人物は長州人と薩摩人が多く、特に長州では吉田松陰、高杉晋作、



©2006「長州ファイブ」製作委員会

大村益次郎、木戸孝允、久坂玄瑞らが有名。もともと、これら「幕末第一世代」は倒幕闘争の中でその多くは死亡してしまい、当時まだ下っ端だった井上馨や伊藤博文などが明治政府で要職を占めるに至ったのは歴史の皮肉……。

長州出身の総理大臣は伊藤博文の他、山県有朋、桂太郎、寺内正毅、田中義一と続いた他、戦後は岸信介と佐藤栄作の2人が長州出身。そして、岸信介を祖父とする安倍晋三氏は久々の長州出身の第90代総理。したがってこの映画は、あらためてそんな安倍晋三総理のルーツをたどる上でもグッドタイミング……。

## 2人に影響を与えた人物は……？

この映画で井上聞多と伊藤俊輔の思想や行動に大きな影響を与えた人物は、高杉晋作（寺島進）と佐久間象山（泉谷しげる）。奇兵隊を結成した高杉晋作は天才中の天才だが、彼のこの当時の思想は「幕府がいかに無力・無能であるかを天下に示す」という、かなり「左翼小児病的」なもの……？ 1862年12月、そんなボスの命令に従って品川御殿山に建設中のイギリス公使館の焼き討ちの実行部隊となった聞多や俊輔たちだったが、炎に包まれた公使館を見ながらその心境は虚しいばかり……？ 他方、信州松代の佐久間象山のところまで、わざわざその「進歩的開国論」について尋ねに行った聞多や俊輔の行動力は立派なもの。そんな2人に象山が教えたことは、「敵を知り己を知れば、百戦危うからず」という孫子の兵法であり、陸海の軍事技術習得の必要性を強調するもの。カンの鋭い聞多は、この言葉によって海外への目が開かされることになったのだ。さらに、渡航費用の面で2人を助けたのが、明治政府の兵部省の設置に伴って兵部大輔となり、現在靖国神社にその銅像が建てられている村田蔵六＝大村益次郎（原田大二郎）。鋭敏な感受性を持った青年に対しては、やはりこんな刺激的な先生たちが不可欠だということをあらためて実感……。

## ロンドンで見たものは……？

この映画は今から約140年前の1863年、東洋の小さな島国から世界最高の文明国イギリスを訪れた「長州ファイブ」の驚きの様子を、イキイキとスクリーン上に伝えている。石でできた立派な高層建物に、石で舗装された道路。テムズ川に

は蒸気船が行き交い、陸には蒸気機関車が疾走。「こんな国に勝てるわけがない」と5人が実感したのは当然……。

そんな5人が学ぼうとするのは「技術」だが、彼らに与えられた期間は5年。そのために勉強しなければならないことは山ほどあるが、異国の地で彼らは勉学に没頭し、次々と自分の求める技術を習得していった。しかし、そんな充実した楽しい留学中にも、長州はそして日本は激動を続けていた……。

## 聞多と俊輔は帰国を決意！

1863年6月25日長州藩は下関で外国船（アメリカ船）を砲撃した。また6月27日には「生麦事件」を原因としてイギリス東洋艦隊が鹿児島湾に侵入し、薩摩藩はこれと砲撃戦を展開した。これは攘夷思想の極端な現れだが、よく考えてみれば無鉄砲もいいところ……？

これに対して、欧米諸国が断固反撃するとの新聞記事を読み、「攘夷」一色となっている藩論を至急「開国」へ転換する必要を痛感した聞多は、ここで「わしゃ国へ帰る！」と宣言した。誰かが動かなければ、長州はそして日本は変わらない、という決意を固めたわけだ。これに同調したのが俊輔なら、あくまで「生きたる機械」を目指すと主張したのが山尾、井上、遠藤の3人。

初志貫徹を誓い、技術を身につけ、それを将来の日本に生かすのも若者の進む道なら、命を張って藩論の転換を目指すのも若者の進む道。やはりあの時代の若者は、自己責任において立派な決断をしていたものだと大いに感心するとともに、こんな映画こそ今ドキの若者に観せなければと痛感した次第……。

## 後半は、看板に偽りあり……？

この映画の前半は、井上聞多を中心として「長州ファイブ」の生きざまをほぼ平等に描き、あの激動の時代の青春群像をイキイキと伝えてくれるうえ、大いに歴史の勉強にもなる面白いもの。しかし、聞多と俊輔が帰国した後は山尾色一色になってしまう。山尾がロンドンからスコットランドの工業都市グラスゴーへ赴いたのは、世界一の建造量を誇るネイピア造船所で、造船技術を学ぶため。ところが映画はその勉学と同時に、工場で働く女性エミリーと山尾との手話を通じた

交流（恋愛模様？）が丹念に描かれていく。それはそれで悪くはないのだが、帰国後人材育成に力を注ぐとともに、盲教育・聾教育の普及にも尽力した山尾とエミリーの手話を通じた交流は1コマの出来事でよかったのでは……？

映画後半がほとんどそれにあてられたのは看板俳優である松田龍平に配慮したため、とつい勘ぐってしまったうえ、これでは後半は『長州ファイブ』という看板に偽りあり、となってしまうのでは……？ 2007(平成19)年1月11日記

ミニコラム

### 萩市と湯田温泉にて……

井上馨、伊藤博文ら「長州ファイブ」以上に有名で人気の高い長州人は、吉田松陰と高杉晋作・木戸孝允。吉田松陰を祀る松陰神社は萩市内にあり、松下村塾の在りし日の姿が。また萩城城下町には、高杉晋作・木戸孝允が生誕した旧宅がある。一方、井上馨の銅像があるのは湯田温泉の高田公園の中。ここは詩人中原中也の故郷で、中原中也詩碑や七郷の碑と並んで明治の元勳の立派な銅像が。萩市が辺鄙な小さなまちだったのは意外だったが、『長州ファイブ』の理解のためには、是非萩市をめぐる旅に行ってみたいもの。

2007(平成19)年7月11日

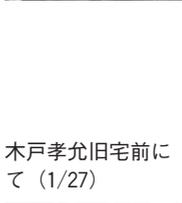


松下村塾石碑前にて (1/27)

2007年1月26～28日広島・山口旅行にて



高杉晋作旧宅前にて (1/27)



木戸孝允旧宅前にて (1/27)



高田公園内  
井上馨像前にて  
(1/28)